

# 階級から大衆へ

## —エティエンヌ・バリバールのイデオロギー論をめぐる—

太田 悠介

### 目次

#### 序

1. バリバールのイデオロギー論「前史」—三つの時間性
  - 1-1. イデオロギーの起源
  - 1-2. イデオロギーとしてのマルクス主義
  - 1-3. バリバールと「西欧マルクス主義」
2. バリバールのイデオロギー論①—階級と大衆の「非 - 接合」
  - 2-1. 『ドイツ・イデオロギー』とプロレタリアート
  - 2-2. 「プロレタリアートの純粋行為」から「被支配者のイデオロギー」へ
3. バリバールのイデオロギー論②—イデオロギーの一般理論からの離脱
  - 3-1. 『反デューリング論』と「プロレタリア・イデオロギー」の体系化
  - 3-2. 『資本論』と「プロレタリアートの政治」
  - 3-3. 大衆、イデオロギーの破れ目

#### 結語

### 序

戦後フランスの社会状況を集約する言葉のひとつとして、「大衆 (masses)」がある。第二次大戦終結直後の 1946 年から始まった「栄光の 30 年」と呼ばれる経済成長は、それまで色濃く残っていた農村社会の痕跡を消し去り、「大衆消費社会」の到来を可能とした<sup>1</sup>。また、経済構造の変化というこの「見えない革命」のもと、大衆は 1968 年 5 月という大規模な異議申し立てを除けば、声をあげないことによって戦後の福祉国家体制を信任する「サイレント・マジョリティ」とであるとされた<sup>2</sup>。

大衆は社会の大多数を占めるが、その数的、量的な大きさゆえに、大衆を構成する個人の具体的な姿を捉えるのが難しい。この大衆の登場によっ

て、もっとも大きな打撃を被ったのは、おそらくマルクス主義の「階級 (classes)」概念であるだろう。生産から消費への転換、中間層の増大といった新たな状況は労働者階級の輪郭を曖昧にし、階級概念の自明性への疑義をもたらした。これに伴い、この概念がこれまで正統性を保証してきた実際の政治的なプログラムも、次第に実情にそぐわないとみなされるようになった<sup>3</sup>。さらには、マルクス主義そのものの危機すらも叫ばれるようになった<sup>4</sup>。

このような階級から大衆へという社会の基軸の変化を踏まえたうえで、本稿はマルクス主義哲学者エティエンヌ・バリバール (1942-) における「大衆」の主題を考察する。バリバールの足跡を概観するならば、その名が初めて知られるようになったのは、1965 年に刊行されたルイ・アルチュセール (1918-1990) らとの共著『資本論を読む』<sup>5</sup>がきっかけである。その後の 1970 年代は、バリバールはアルチュセールとともにフランス共産党内で、「プロレタリア独裁」を擁護する反指導部派の立場を堅持した<sup>6</sup>。バリバールの思想に転機が訪

<sup>3</sup> André Gorz, *Adieux au prolétariat. Au-delà du socialisme*, Paris, Galilée, 1980.

<sup>4</sup> Louis Althusser, « Marx dans ses limites » [1978], dans *Écrits philosophiques et politiques*, Tome 1, textes réunis et présentés par François Matheron, Paris, Stock/Imec, 1994, pp. 359-524. [「自らの限界にあるマルクス」『哲学・政治著作集 I』市田良彦・福井和美訳、藤原書店、327-484 頁]

<sup>5</sup> Louis Althusser, Étienne Balibar, Roger Establet, Pierre Macherey, et Jacques Rancière, *Lire le Capital*, 2 tomes, Paris, Maspero, 1965. [『資本論を読む』今村仁司訳、全 3 巻、ちくま学芸文庫、1996-1997 年]

<sup>6</sup> フランス共産党は 1976 年 2 月の党大会でプロレタリア独裁放棄を決定し、ソビエトの指導を離れて西側の議会主義の伝統に即した社会主義を目指す「ユーロ・コミュニズム」路線を採用する。アルチュセールとバリバールはこの方針に党内で反対の論陣を張った (Étienne Balibar, *Cinq études du matérialisme historique*, Paris, Maspero, 1974 [『史的唯物論研究』今村仁司訳、新評論、1979 年]; Sur la dictature du prolétariat, Paris, Maspero, 1976 [『プロレタリア独裁とはなにか』加藤晴久訳、新評論、1978 年])。これに対して、当時ユーロ・コミュニズムの潮流に近い立場にあったニコス・プーランツァスは、プロレタリア独

<sup>1</sup> Jean Fourastié, *Les Trente Glorieuses ou la révolution invisible de 1946 à 1975*, Paris, Fayard, 1979.

<sup>2</sup> Jean Baudrillard, *À l'ombre des majorités silencieuses ou la fin du social*, Fontenay-Sous-Bois, Cahiers d'Utopie, 1978.

れたのは、共産党から除名された 1981 年以降のことである。というのも、マルクスと並んでバリバールの思想的な典拠となるスピノザを初めて体系的に論じた『スピノザと政治』(1985)<sup>7</sup>、「世界システム」論の代表的論者イマニュエル・ウォーラーステインとの共著『人種・国民・階級』(1988)<sup>8</sup>を通じて、80 年代に大衆の主題が前面に現れるからである。この主題は主著『大衆の恐怖』(1997)<sup>9</sup>に受け継がれ、今日のバリバールの思想の核となっている。

本稿では、同著のなかで大衆の主題をもっとも詳細に論じた「マルクス主義におけるイデオロギーの浮動」と題する一連のテキストを主に検討する。バリバールは、マルクス主義のイデオロギー概念を題材としながら、その階級概念を批判的に吟味することで、これとは区別される大衆の主題を導いている。バリバールは階級概念の延長線上で大衆概念を捉えながら、同時に大衆概念が階級概念に対して「過剰」であることを示す。そうすることによって、マルクス主義のなかに階級概念とは独立したかたちで大衆概念が存在することを明らかにするのである。

以下、本稿の概略を記す。第 1 節では、バリバールのイデオロギー論を検討するための前提として、バリバールのイデオロギー論の「前史」を洗い出す。後述のように、この前史のうちに、三つの異なる時間性を見出すことができるだろう。第 2 節と第 3 節をバリバールのイデオロギー論の本格的な検討に充てる。バリバールはマルクスとエンゲルスのテキストにおけるイデオロギー、階級、大衆の三項の間に結ばれた関係の自明性を問い直

すことで、大衆の主題の位置づけを明らかにするという作業を行っている。この点の解明が第 2 節と第 3 節の主眼である。

## 1. バリバールのイデオロギー論「前史」—三つの時間性

イデオロギー概念はマルクス主義の鍵概念のひとつである。それゆえ、マルクス主義のプロレタリアート概念から大衆概念を腑分けしようとするバリバールが、イデオロギー概念を具体的な題材とすることは、きわめて正統な手法であると言える。しかし、バリバールのイデオロギー論を考察するためには、より俯瞰的な観点からイデオロギー概念それ自体の歴史をおさえておく必要があるだろう。実は三つの重層的な時間性がバリバールのイデオロギー論の背後にはある。本節はまず、イデオロギー概念の原点に立ち戻り、その原義を確認する (1-1)。次に、これを踏まえて、イデオロギー論全体の歴史のなかにマルクス主義を位置づけるという作業を行う (1-2)。そして最後にバリバールの思想の舞台となる戦後「西欧マルクス主義」について考察する (1-3)。以上のように本節はバリバールのイデオロギー論の「前史」を重層的に再構成することを目指す。

### 1-1. イデオロギーの起源

イデオロギーという語の起源が第一の時間性を形成する。今日では、イデオロギーは一般に観念そのものを指し、この語にはしばしば否定的な意味合いが込められる。しかし、イデオロギーの語を初めて用いたとされるアントワヌ・デステュット・ド・トラシー (1754–1836) を中心とする 18 世紀の哲学者たちは、この語をまったく異なる意味で了解していた。彼らは人間の観念を全般的に対象とする科学研究 (science des idées) を掲げて、これを「観念 (idée)」についての「学 (-logie)」、すなわち「観念学 (idéologie)」と呼び、さらには自らを「観念学派 (idéologues)」と称した<sup>10</sup>。このように、「イデオロギー」は新しい学問の名であり、「イデオログ」はその専門家集団を指してい

裁の概念が国家の外部に革命政党の存在を想定しており、国家が「力関係の凝縮」であることを理解していないという批判を提起した (Nicos Poulantzas, *L'État, le pouvoir, le socialisme*, Paris, PUF, 1978. [『国家・権力・社会主義』田中正人訳、ユニテ、1984 年])。バリバールはプーランツァスからの影響が、その後アルチュセールから距離をとる原因のひとつとなったと回顧している (Étienne Balibar, *La Proposition de l'Égaliberté*, Paris, PUF, 2010, p. 181)。

<sup>7</sup> Étienne Balibar, *Spinoza et la politique*, Paris, PUF, 1985. [『スピノザと政治』水嶋一憲訳、水声社、2011 年]

<sup>8</sup> Étienne Balibar et Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe : les identités ambiguës*, Paris, La Découverte, 1988. [『(新装版) 人種・国民・階級——揺らぐアイデンティティ』若森彰孝ほか訳、大村書店、1997 年]

<sup>9</sup> Étienne Balibar, *La Crante des masses. Politique et philosophie avant et après Marx*, Paris, Galilée, 1997.

<sup>10</sup> Paul Ricœur, *L'Idéologie et l'utopie*, trad. Myriam Revault d'Allonnes et Joël Roman, Paris, Seuil, 1997, p. 217. [『イデオロギーとユートピア——社会的想像力をめぐる講義』川崎惣一訳、新曜社、2011 年、254 頁]

た。人間の観念を統御する法則の解明という彼らの野心的な研究の背後にあったのは、発見されるであろうこの法則に基づいて社会を設計することで、より合理的な社会が建設できるという啓蒙期に特徴的な楽観的確信であった。

しかし、ナポレオンがイデオログに浴びせた批判が、イデオロギーの意味を一変させた。ナポレオンによれば、彼らは机上の空論に拘泥するばかりで、火急の実地的な課題に少しも貢献せず、「観念的 (idéologique)」だというわけである。ナポレオンのイデオロギー批判とは、政治的プラグマティストの批判であった。その結果、イデオロギーは非現実的な観念それ自体を指すようになり、イデオログはそれを喧伝する人々という現在の意味に帰着することになった<sup>11</sup>。

## 1-2. イデオロギーとしてのマルクス主義

イデオロギーの原義は以上のように整理することができるが、イデオロギー概念がそもそもなぜこの時期に生まれたのかを知るためには、より巨視的な観点からの検討が必要である。とりわけ考慮すべきなのは、フランス革命以降、社会の自律性という考え方が登場したという点である。

宗教との切断によって誕生した世俗的な社会は、その秩序の正統性を社会の外部の超越的なものに求めることがもはや不可能になる。秩序の他律的な基礎づけを断念した以上、社会は自らの根拠を自らの手で作り上げる必要が生じるのである。イデオロギーとは広義には、社会が自己を認識するために内在的に形成するこの言説のことを指す<sup>12</sup>。このように、ド・トラシーらイデオログが、人間の観念の解明に基づく合理的な社会の設計を構想したのは、人間的な世界が内在的に形成されているというフランス革命以降の価値観の転換があったがゆえなのである。

ところで、社会を外部から統べる宗教が後退することは、宗教がそれまで保証していた精神の統一が、社会の内部において失われることもまた意味する。それゆえ、社会が内在的に形成する言説

という先のイデオロギーの定義には、さらにもうひとつの定義を付け加える必要が生じるだろう。それはイデオロギーが本質的に複数存在するということである<sup>13</sup>。精神の統一の崩壊が、互いに正当性を主張する複数のイデオロギーを並存させ、これらイデオロギー間の対立を不可避とするのである。

本稿がマルクス主義はイデオロギーであると言明するのは、この文脈においてである。19世紀のマルクス主義もまた、自律的な社会の組織化を説明する原理のひとつである限りにおいて、それはイデオロギーでありうる。こうしてイデオロギーの歴史のなかにマルクス主義が位置づけられる。以上が第二の時間性である。

## 1-3. バリバルと「西欧マルクス主義」

バリバルのイデオロギー論を考察するにあたって考慮すべき第三の論点は、先述のイデオロギーとしてのマルクス主義と歴史的状況の一致あるいは不一致という点である。イデオロギーとしてのマルクス主義が19世紀以降、説得力を獲得した理由のひとつは、階級概念に依拠した説明の体系が当時の歴史的な状況と合致していた点に求められる。それは、前資本主義的な社会構造が漸進的に崩壊してゆくことで、農村から都市へと人口が移動し、都市労働者として吸収されるという事態である<sup>14</sup>。しかし、イデオロギーとしてのマルクス主義の正当性が歴史的な状況に依存していたとすれば、この状況が変化する場合にはマルクス主義の位置も変わることがありうる。バリバルが「20世紀マルクス主義」というかたちで、時代区分を明確にしたうえでマルクス主義を論じるのは、歴史的状況とイデオロギーとしてのマルクス主義の相互性というこの問題に意識的であるからである<sup>15</sup>。

バリバル自身によるこの示唆を踏まえたうえ

<sup>13</sup> *Ibid.*, pp. 102-103.

<sup>14</sup> たとえばエリック・ヴェイユは、農民の産業労働者への転換に「近代の大衆の誕生」を見出す。Eric Weil, *Essais et conférences*, Tome 2, Politique, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1991, pp. 260-261.

<sup>15</sup> Étienne Balibar, *Écrits pour Althusser*, Paris, La Découverte, 1991, p. 100.『ルイ・アルチュセール——終わりのなき切断のために』福井一美訳、藤原書店、1994年、214-215頁]

<sup>11</sup> Terry Eagleton, *Ideology : An Introduction*, London/New York, Verso, 1991, pp. 63-70. 『イデオロギーとは何か』大橋洋一訳、平凡社、1999年、144-157頁]

<sup>12</sup> Marcel Gauchet, *La Démocratie contre elle-même*, Paris, Gallimard, 2002, pp. 91-96.

で、本稿はバリバールのイデオロギー論の置かれたトポスをさらに特定するために、これを 20 世紀の「西欧マルクス主義」の文脈のなかに位置づける<sup>16</sup>。これが第三の時間性である。バリバールの置かれたこの新たな歴史的な状況下で浮上してきたのが、本稿の冒頭で提起した階級から大衆へという社会の基軸の移行、さらには階級と大衆の「非 - 接合 (non-articulation)」の問題である。

マルクス主義においてこの問題に言及するのは、もちろんバリバールが初めてではない。だが、「西欧マルクス主義」の文脈においては、その始祖とされるジョルジ・ルカーチ (1885-1971) に由来する「階級意識」論が、この問題への接近を困難にしてきたことを指摘しなければならない<sup>17</sup>。『歴史と階級意識』(1923) のルカーチは、人間と人間が自らの手で生み出したにもかかわらず疎遠な力として現出する資本主義社会との分裂を、「主体」と「客体」の分裂として描いた。自己意識が対象へと外化し、再び自己を取り戻すというヘーゲルの意識の発展の物語をなぞりながら、ルカーチはプロレタリアートが資本主義社会を転覆して人間の疎外状態を廃棄することで、主体と客体の弁証法的総合を果たすと考えたのである。プロレタリアートが資本主義社会の存立構造を知ることができ、したがって「真の意識」を持つとする「階級意識」論においては、この意識の獲得に至らない大衆の「虚偽意識」の問題は副次的な問題の域を

出ない。ルカーチにおいて階級概念は完全な説明の体系を備えており、その外部は存在しない。こうして階級意識概念を通じて、階級と大衆の「接合 (articulation)」が完結する。

しかし、先述のようにフランスを含む戦後先進諸国では、むしろ「階級意識」の獲得に至らない大衆こそが常態であるという認識が広がってゆく。つまり、ルカーチの「階級意識」論では十分に考慮されていない階級と大衆の「非 - 接合」が現実の問題として浮上してきたのであった。

バリバールのイデオロギー論は、以上のような三つの時間性が重なった「前史」によって支えられている。この前史から浮かび上がってきた階級と大衆の「非 - 接合」に応えるために、バリバールはマルクスとエンゲルスの読解を通じてイデオロギー、階級、大衆という三項にあらたな布置を与えるのである。

## 2. バリバールのイデオロギー論①—階級と大衆の「非 - 接合」

バリバールのイデオロギー論は、マルクス主義のイデオロギー概念を徹底的に歴史化して把握する<sup>18</sup>。イデオロギー、階級、大衆という三項の関係を定義し直すことで、階級概念によっては大衆を完全に包摂できないという、階級と大衆の「非 - 接合」の問いを開く。後述のように、この問いはマルクス主義のイデオロギー論の到達点というよりも、むしろそのアポリアとして姿を現すことになるだろう。

バリバールにおいてはこの階級と大衆の「非 - 接合」という観点から、マルクスとエンゲルスのテキストがすべて再検討されることになる。具体的な対象となるのは、マルクスとエンゲルスが 1845 年から 1846 年にかけて共同で執筆した『ドイツ・イデオロギー』、エンゲルスの 1878 年の単著『反デューリング論』、そして 1867 年に刊行されたマルクス著『資本論』第 1 巻である。以下、バリバールの論証をたどりながら、そのイデオロギー論を『ドイツ・イデオロギー』(2-1、2-2)、『反デューリング論』(3-1)、『資本論』第 1 巻 (3-2) の順で考察する。

<sup>16</sup> 「西欧マルクス主義」の語を初めて用いたのはモーリス・メルロー＝ポンティであるが、メルロー＝ポンティはルカーチをその始点に置いた (Maurice Merleau-Ponty, *Les Aventures de la dialectique*, Paris, Gallimard, 1955, pp. 43-80. [『弁証法の冒険』滝浦静雄・木田元・田島節夫・市川浩訳、みすず書房、1972 年、41-79 頁])。ペリー・アンダーソンは「西欧マルクス主義」の特質として、哲学への関心の集中、理論と実践の分断、芸術と文化の分野における研究の進展を指摘し、さらにこれに大衆との遊離を付け加えている。「西欧マルクス主義」に関しては、さしあたって以下を参照。Perry Anderson, *Considerations on Western Marxism*, London, New Left Books, 1976 [『西欧マルクス主義』中野実訳、新評論、1979 年]；Martin Jay, *Marxism and Totality. The Adventure of a Concept from Lukács to Habermas*, University of California Press, 1984 [『マルクス主義と全体性——ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』荒川幾男ほか訳、国文社、1993 年]；André Tosel, *Le Marxisme du 20<sup>e</sup> siècle*, Paris, Sylleps, 2009.

<sup>17</sup> Georg Lukács, *Histoire et conscience de classe*, Paris, Minuit, 1960. [『歴史と階級意識』平井俊彦訳、未来社、1962 年]

<sup>18</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., pp. 173-174.

## 2-1. 『ドイツ・イデオロギー』とプロレタリアート

マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』を執筆した 1840 年代初頭は、フォイエエルバッハ、ブルーノ・バウアーらヘーゲル左派がプロイセン国家に抱いていた幻想が裏切られた時期であった。ヘーゲル左派は『ドイツ年誌』と『ライン新聞』を中心に、国家の宗教からの解放（政教分離）、言論・出版の自由によるヘーゲルの「理性国家」の実現を目指していた。しかし、期待を寄せていたプロイセン国家によって両紙が 1843 年に発禁処分を受けたことで、ヘーゲル左派の「理性国家」論は反省を迫られることになる。

マルクスとエンゲルスは、ヘーゲル左派が現実の諸個人が織りなす社会的諸関係を認識していなかったがために、法治国家に普遍的な歴史の展開の担い手を見るという誤りを犯したと考えた。現存する社会的諸関係から遊離したヘーゲル左派の意識は、こうして物質的労働と精神的労働の分業の批判へと接続され、イデオロギーの批判はこの文脈で登場する。ここで注視すべきは、イデオロギーとプロレタリアートが結ぶ特殊な関係性である。以上を踏まえ、『ドイツ・イデオロギー』の次の一節を確認したい。

支配階級の思想が、どの時代においても、支配的な思想である。すなわち社会の支配的な物質的・精神的威力である階級が、同時に、その社会の支配的な精神的威力である。物質的な生産のための手段を手中に収める階級は、そのことによって、同時に、精神的な生産のための手段をも意のままにする。それゆえ、そのことによって同時にまた、精神的な生産のための手段を持たない人々の思想は、概して、この階級に従属させられている。支配的な思想とは、支配的な物質的諸関係の観念的表現、支配的な物質的諸関係が思想として捉えられたものに他ならない<sup>19</sup>。

支配階級は物質的な諸関係を生み出すための手段のみならず、思想を生み出す手段もまた掌握する。その結果、その思想がそのまま時代の支配的な思想として流通する。換言すれば、支配的な思想が被支配階級によってもまた、そういうものとして受容されるのである。「支配階級の思想」がつねに時代の「支配的な思想」、すなわちイデオロギーでありうるのはそのためである。

したがって、支配階級の存在から切り離されて自立したイデオロギーを、その作り手である支配階級のもとに送り返さねばならない。「意識」が「生活」を規定するのではなく、「生活」が「意識」を規定することを支配階級に思い出させる必要があるのである<sup>20</sup>。こうして、現実の社会的諸関係からイデオロギーが遊離して観念化する過程を解明することが、マルクスとエンゲルスの唯物論の目標として定義されることになる<sup>21</sup>。

しかし、イデオロギーの観念化の解明のための理論というこの『ドイツ・イデオロギー』の唯物論の定義は、一見明白なようであるが、実はいまだ不確かである。バリバルによると、それは同著でのプロレタリアートの位置づけに由来するという。バリバルは『ドイツ・イデオロギー』がプロレタリアートに与えた特殊な役割を「プロレタリアートの純粋行為」と呼ぶ<sup>22</sup>。バリバルはプロレタリアートと唯物論とを照らし合わせることで、両概念の間に潜む矛盾を浮かび上がらせるという手法をとる。

『ドイツ・イデオロギー』に立ち戻るならば、マルクスとエンゲルスは、プロレタリアートはある特殊な役割を担う限りにおいて、普遍的階級でありうるとしていた。歴史的な観点からすれば、ブルジョワジーを含むプロレタリアート以前の支配階級は旧い支配階級の打倒という普遍性の装いのもとで、自らの階級の特殊利益を実現してきたに過ぎない。これはある支配階級から次の支配階級への移行、ある特殊利益の次なる特殊利益への置

<sup>19</sup> Karl Marx et Friedrich Engels, *Idéologie allemande, première partie Feuerbach*, précédée des *Thèses sur Feuerbach*, trad. Renée Cartelle et Gilbert Badia, Paris, Éditions Sociales, 1974, p. 86. 『ドイツ・イデオロギー』 廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、2002 年、110-111

頁〕。なお、外国語文献からの引用に際して訳書がある場合には、それを参照したうえで訳出している。

<sup>20</sup> *Ibid.*, pp. 50-51. [同書、31 頁]

<sup>21</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., pp. 177-178.

<sup>22</sup> *Ibid.*, pp. 179-184.

き換えである。それに対してプロレタリアートは、支配階級の特殊利益を自らの特殊利益に代えることはない。それはプロレタリアートが普遍性を自らの手で否定することを意味する<sup>23</sup>。『ドイツ・イデオロギー』では、プロレタリアートが普遍的階級たりうるためには、プロレタリアートの利益が直接普遍的な利益と一致すること、すなわちプロレタリアートがそれぞれの特殊利益を持つ他の階級と同列の階級であるのをやめるという条件を満たす必要がある。

ここからバリバールは、『ドイツ・イデオロギー』においては、実はプロレタリアートがふたつの様態を持つことを指摘する。一方にいまだ他の階級と同列の特殊利益に囚われた「一階級としてのプロレタリアート」、他方、一階級であるのをやめて普遍的な利益を代表するようになる「大衆としてのプロレタリアート」である<sup>24</sup>。そして、社会の完全な解体を引き起こす力として、マルクスとエンゲルスが評価するのは、後者である。つまり、「もはや階級とは見なされず、階級としては承認されていない、今日の社会の領域内ですでに階級や国民性等々の一切の解消を体現している」<sup>25</sup>大衆としてのプロレタリアートである。バリバールはこのように、普遍的階級としてのプロレタリアートという『ドイツ・イデオロギー』の定義を踏まえたうえで、プロレタリアートの二様態の弁別を行い、次のような逆説的な帰結を導く。すなわち、この著作が与えた役割にプロレタリアートが完全に一致するときには、プロレタリアートはもはや「一階級」ではない。プロレタリアートはそのとき、「非階級」として、すなわち大衆として、現れるということである。以上が、バリバールが「プロレタリアートの純粋行為」と呼ぶ事態である。

『ドイツ・イデオロギー』の唯物論は「支配的な思想」の批判にその基礎を置いていた。その際にはイデオロギーと唯物論の対峙が問題となっていた。ところが、今や「プロレタリアートの純粋行為」という第三項が介入することで、唯物論の理

論的な構築という当初の目的は中断される。バリバールによれば、その理由は「プロレタリアートの純粋行為」が、「大衆としてのプロレタリアート」による社会の全面的な解体以外の外的な審級を一切認めない、いわば絶対的な実践として定義されている点に求められる。これは「プロレタリアートの純粋行為」以外のすべてをイデオロギーと批判するきわめて素朴な経験論である<sup>26</sup>。これこそが、「生活」、「生産」、「実践」といった異質な諸要素を唯物論のうちにすべて集約することを可能とされていたのである。

## 2-2. 「プロレタリアートの純粋行為」から「被支配者のイデオロギー」へ

『ドイツ・イデオロギー』では、イデオロギー／唯物論、イデオロギー／プロレタリアートというふたつの対立軸が並存し、両対立軸間の関係は明かされない。マルクスとエンゲルスが意図していた唯物論の構築が頓挫するのはそのためである。そして、バリバールによれば、イデオロギーとプロレタリアートのこの素朴な二分法が、次の二点の難題をもたらすという。以下では、この点を手短かに確認したい。

第一に、この二分法では、マルクスとエンゲルスの中心的な課題となる「経済学批判」の理論的な位置を確定できない。両者の経済学批判は古典派経済学をその対象とするが、古典派経済学を現実と幻想の完全な分離という『ドイツ・イデオロギー』の図式に収めることは不可能である。古典派経済学は単なる幻想ではなく、価値、労働分業、私的所有といった固有の理論的な客観性を有している。マルクス・エンゲルスの経済学批判はこれらの理論的なカテゴリーを、労働価値、知的労働と肉体労働の分離、所有の廃棄といった別の理論的なカテゴリーによって、内側から解体することであった。つまり、古典派経済学とマルクス・エンゲルスの経済学批判は、幻想と現実の対立というよりも、同じ世界という対象を分節化する方法をめぐる争いなのである。したがって、マルクスとエンゲルスが古典派経済学の理論的カテゴリーの脱構築に着手するとき、イデオロギーとプロレタリアートの素朴な対立から離れるのは必然であ

<sup>23</sup> Karl Marx et Friedrich Engels, *Idéologie allemande*, op. cit., pp. 88-89. [前掲書、115-117 頁]

<sup>24</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., p. 182.

<sup>25</sup> Karl Marx et Friedrich Engels, *Idéologie allemande*, op. cit., p. 75. [前掲書、83 頁]

<sup>26</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., p. 180.

っただろう。バリバールはこのように推論する<sup>27</sup>。

第二に、政治的媒介の問題である。イデオロギーとプロレタリアートの対立の図式では、「プロレタリアートの純粋行為」だけが幻想に対する現実の極を占め、それ以外のものはすべてイデオロギーの側に割り振られていた。その結果、プロレタリアートとそれ以外の階級の連携は「不純」でしかありえず、政治的媒介が存在する余地は無かった<sup>28</sup>。バリバールは、『ドイツ・イデオロギー』と後のマルクスとエンゲルスの共著『共産党宣言』(1848)との対照的な性格を指摘する。両著作の決定的な違いは、『共産党宣言』が階級社会から階級なき社会へと向かう「過程 (*processus*)」あるいは「移行 (*transition*)」の概念をあらたに導入している点にある<sup>29</sup>。そこでは革命は、「プロレタリアートの純粋行為」による社会の瞬間的かつ全面的な解体とは、もはや考えられていない。それはむしろ社会の矛盾をはらんだ諸力を戦略的に結合させることである。革命は諸階級の存在をこえたプロレタリアートの実践ではなく、諸階級の対立・闘争の内部でしか考えることはできない。したがって、その過程でプロレタリアートが、諸勢力を自らの有利な方向へと導く可能性をすべて「イデオロギー的」、さらには「ブルジョワ的」と切って捨てるとすれば、それは自殺行為にほかならない。このように、バリバールは『ドイツ・イデオロギー』から『共産党宣言』への移行に際して、マルクスとエンゲルスが政治的媒介の問題をはじめて明確に認識したことを強調する。

以上のように、『ドイツ・イデオロギー』のイデオロギー論は、経済学批判の理論的地位の問題、プロレタリアートの政治的媒介の問題というこれら二点の理論的な行き詰まりに逢着する。そこから抜け出すためにマルクスとエンゲルスは、プロレタリアートとイデオロギーの間に完全な二律背反が成り立つとする『ドイツ・イデオロギー』の推論を断念しなければならなかった。マルクスとエンゲルスは実際にこれ以降、『ドイツ・イデオロギー』とは異なる仕方でイデオロギーの問題に着手するようになるという。それゆえ、バリバール

にとって『ドイツ・イデオロギー』とは、マルクスとエンゲルスのその後のあらたな展開を告げる著作である。

〔プロレタリアートとイデオロギーが絶対的には対立しないという〕解釈を最後まで敷衍してゆくためには、支配的なイデオロギーに対して「被支配的なイデオロギー」を想定しなければならなくなるだろう。[…] 支配的なイデオロギーにはいかなる被支配的なイデオロギーも対応しないという、支配的なイデオロギーの概念の不安定なこの均衡に、『ドイツ・イデオロギー』のすべてがかかっている！というのも、〔被支配的なイデオロギーという〕この語は、結局のところプロレタリア・イデオロギーの概念を形成することなしには、したがってプロレタリアートとあらゆるイデオロギーとの分離を危うくすることなしには、はっきりとは提起しえないからである<sup>30</sup>。

経済学批判の位置づけ、政治的媒介の両問題は、『ドイツ・イデオロギー』のイデオロギー論に内在する困難であった。バリバールは、マルクスとエンゲルスはこの困難を克服するために、『ドイツ・イデオロギー』以降、同著の想定とは正反対の道を選んだという。革命が「過程」あるいは「移行」であるならば、プロレタリアートはそのさなかに、支配的なイデオロギーに対抗して被支配者のイデオロギーを醸成することが当然予想される。『ドイツ・イデオロギー』におけるイデオロギーとプロレタリアートの二律背反が維持できなくなったことで、マルクスとエンゲルスはまったくの語義矛盾として意味をなさないはずだった「プロレタリア・イデオロギー」の存在を認めるところから再出発することを迫られるのである。

### 3. バリバールのイデオロギー論②—イデオロギーの一般理論からの離脱

『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスとエンゲルスは、「プロレタリア・イデオロギー」の存在を想定し、それまでとは異なる仕方でイデオロギー論を展開する。バリバールによれば、『ドイ

<sup>27</sup> *Ibid.*, pp. 184-185.

<sup>28</sup> *Ibid.*, pp. 185-186.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 191.

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 188-189.

ツ・イデオロギー』で両者が直面したイデオロギーとプロレタリアートの分離不可能性という論点は、マルクスとエンゲルスそれぞれに対極となる二種のイデオロギーの理論化を促したという。エンゲルス著『反デューリング論』とマルクス著『資本論』第1巻である。両著作が行うイデオロギー概念の再定式化から明らかになるのは、ここでも階級と大衆の「非・接合」の主題である。

### 3-1.『反デューリング論』と「プロレタリア・イデオロギー」の体系化

『反デューリング論』からバリバールが導く論点は多岐にわたるが、ここでは『ドイツ・イデオロギー』との連続性にだけ着目したい<sup>31</sup>。

バリバールの『ドイツ・イデオロギー』読解を要約するならば、そこでは究極的には「プロレタリアートの純粋行為」だけが物質的であり、それ以外のものはすべてイデオロギーであるという素朴な二項対立の前提が、観念論の批判を担うべき唯物論の定義を難しくすることが指摘されていた。それに対して、『反デューリング論』は「理論的な唯物論」を自明視しているばかりか、唯物論の体系の完成が問題となっている。エンゲルスは当時最新の自然科学の研究成果を取り入れ、唯物論に完結した理論の地位を与えようとするのである<sup>32</sup>。

バリバールはこの点に、『ドイツ・イデオロギー』以後のエンゲルスがたどりついたひとつの帰結を見出す。『反デューリング論』の唯物論とは、実は『ドイツ・イデオロギー』を経て浮上してきた「プロレタリア・イデオロギー」の別名なのである。観念論に対抗しうる理論としての体系を備えた唯物論を提示すること、すなわち「プロレタリア・イデオロギー」を完成させること、これが『反デ

ューリング論』の狙いであった<sup>33</sup>。

しかし、プロレタリアートとイデオロギーの間に本来ならばあったはずの矛盾が忘れられ、「プロレタリア・イデオロギー」の存在が自明視される時、その代償は小さくない。なぜなら、「プロレタリア・イデオロギー」とそれ以外の「支配階級のイデオロギー」とを区別する指標はもはやないからである。「こうして、私たちは『革命的イデオロギー』が自ら『支配的イデオロギー』となるのを自撃する」<sup>34</sup>。

『ドイツ・イデオロギー』が持っていた「支配階級のイデオロギー」批判が、今度は『反デューリング論』に向かうことになるだろう。体系化した「プロレタリア・イデオロギー」は、他の「支配階級のイデオロギー」と同様に、階級と大衆の「接合」の可能性を欠いている。この問題は『反デューリング論』においても、依然として未解決のままである。

### 3-2.『資本論』と「プロレタリアートの政治」

『ドイツ・イデオロギー』から『反デューリング論』への移行は、「プロレタリア・イデオロギー」の完成として特徴づけられる。しかし、体系化の代償は、唯物論が理論として閉域を作ることであった。その結果、階級と大衆の「非・接合」の問題が『ドイツ・イデオロギー』と同様に残されたのであった。

バリバールによれば、『反デューリング論』が陥った完全な「プロレタリア・イデオロギー」の基礎と異なる理路は、実は『資本論』第1巻にあるとされる。ところで、『資本論』第1巻には、プロレタリアートの語自体がほとんど登場しない<sup>35</sup>。

<sup>31</sup> 「哲学」、「経済学」、「社会主義」の全三篇から成る『反デューリング論』は、当時ベルリン大学で教鞭をとっていたオイゲン・デューリングの批判を通じて、マルクス主義理論の体系的説明を試みたエンゲルスの著作である。この著作から3章が抜粋され、1880年にまずフランス語版『空想的社会主義と科学的社會主義』が刊行される。1882年のドイツ語版ではこの3章にあらたに「空想的社會主義」、「弁証法的唯物論」、「資本主義の発展」の表題がつき、題名も『空想より科学へ——社會主義の発展』に変わった。同書は「マルクス主義」の「入門書」として、もっとも広く読まれた著作のひとつである。

<sup>32</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., p. 196.

<sup>33</sup> Étienne Balibar, *La Philosophie de Marx*, Paris, La Découverte, 1993, p. 103. [『マルクスの哲学』杉山吉弘訳、法政大学出版局、1995年、160-161頁]

<sup>34</sup> Étienne Balibar, *Écrits pour Althusser*, op. cit., p. 108. [前掲書、228頁]

<sup>35</sup> プロレタリアートの語は第8章「労働日」に登場する唯一の例外 (Karl, Marx, *Le Capital. Critique de l'économie politique (Quatrième édition allemande)*, Livre premier, Le procès de production du capital, trad. Jean-Pierre Lefebvre, Paris, Éditions sociales, 1983, p. 319. [『資本論』向坂逸郎訳、第2巻、岩波文庫、1969年、186頁])を除くと、冒頭のヴィルヘルム・ヴォルフへの献辞 (*Ibid.*, p. I [同書、第1巻、9頁])に一度、その後はすべて、著作のほぼ最後半



しかし、プロレタリアートの語が見当たらないからといって、『ドイツ・イデオロギー』と『反デューリング論』で展開されているプロレタリアートとイデオロギーをめぐる議論が、『資本論』第1巻において中断されたわけではないという。むしろ、両概念の間の関係が異なる仕方では定義されている。そうであるからこそバリバールは、第2節で確認した『ドイツ・イデオロギー』が残した経済学批判の理論的地位の問題、プロレタリアートの政治的媒介の問題の解決の糸口を、『資本論』第1巻のなかに探し求めるのである。

第一に、経済学批判の理論的位置の問題である。バリバールはこの点に関して、マルクスの経済学批判とその対象である古典派経済学との間にある前提の違いを強調する。それは、マルクスが行った労働過程と国家の「理論的短絡 (court-circuit théorique)」に由来するという<sup>36</sup>。古典派経済学は、労働過程と国家との間に設けられた私的領域(「経済」)と公的領域(「政治」)の分離を所与とする。そこでは国家は、所有権をはじめとする制度的な媒介を用いることで、私的領域とされる労働過程から切り離され、自律した公的領域(「政治」)を確保し、これを統括するとされる。バリバールによれば、マルクスにとって古典派経済学とは、この分離に科学的な基礎を与えるものであった<sup>37</sup>。それに対して、マルクスが「経済学批判」の名のもとに『資本論』第1巻で行うのは、古典派経済学が分離する労働過程と国家の両領域を、生産関係という単一の解釈枠組みを用いて、同時に分析の対象とすることである<sup>38</sup>。これがバリバールの言うところのマルクスの「理論的短絡」である。労働過程と国家とを横断するという「理論的短絡」を行う『資本論』第1巻が、『ドイツ・イデオロギー』の枠組みとは、すでに別の次元にあるのは明らかである。幻想と現実、イデオロギーとプロレ

タリアートの対置はもはや問題ではないからである。つまり、経済学批判の理論的位置づけの問題は、『資本論』第1巻では解決されている。

第二に、政治的媒介の問題である。しかし、政治的媒介と言っても、ここでは「政治」の語の含意そのものが問題となる。というのも、労働過程と国家の「理論的短絡」を踏まえたマルクスが考える「プロレタリアートの政治」は、労働過程と国家の分離に基づいた一般的な意味での「政治」とは一致しないからである。より正確に言えば、労働過程と国家の分離によって画定される国家と社会、政治と経済、公的領域と私的領域との不一致にこそ、その本質が存在する。古典派経済学が画定する分割線を前提とするかぎり「非政治的」とみなされる領域こそが、プロレタリアート固有の政治の場となる<sup>39</sup>。

このプロレタリアートの政治は、労働過程と国家を横断する生産過程を直接に問題としようる一方で、同時に次のようなジレンマに直面する。つまり、プロレタリアートは資本の敵対者なのか、あるいは国家の敵対者なのかというジレンマである<sup>40</sup>。「プロレタリアートの政治」は、通常の意味での「政治」と「経済」の分割線をまたぐために、この両領域の間で引き裂かれる危険につねに晒される。バリバールによれば、『資本論』第1巻のマルクスはこのジレンマに対して、あくまで原則的な解答だけを示したという。それは「資本主義に『典型的な』階級構造の特徴を示すと同時に、[...] 程度の様々な『プロレタリア的条件』が大衆の運動へと転化する過程を明らかにする」<sup>41</sup>ことであった。

こうしてバリバールは、階級としてのプロレタリアートと大衆としてのプロレタリアートというふたつの様態が、『資本論』第1巻にも現れることを示す<sup>42</sup>。資本による大衆の労働力への転化によって、傾向としての大衆のプロレタリア化を確認することは可能である。しかし、それはあくまで傾向であって、階級としてのプロレタリアートと大衆としてのプロレタリアートというこれらふたつの様態の一致を約束するわけではない。それゆえ、ブルジョワジー対プロレタリアートという「典

部にあたる第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」と第24章「いわゆる本源的蓄積」に集中しており、ここで20回程度登場するだけである。そのうちプロレタリアートと資本家とを直接対峙させる箇所に限って言えば、わずか一度だけにすぎない (*Ibid.*, p. 688 [同書、第3巻、180頁])。

<sup>36</sup> Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., pp. 234-235.

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 235.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 241.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 240.

<sup>40</sup> *Ibid.*, pp. 243-244.

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 246.

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 244.

型的な」二大階級への分裂は、複雑な階級分化の無数の可能性に対して、あくまでシェーマを提供するだけにすぎない。つまり、プロレタリアートと大衆の「接合」に対する解決策は、ここでも見出すことができないのである。以上を踏まえ、バリバールの読解を要言するならば、『資本論』第1巻では経済学批判の位置づけの問題が解決されたのとは対照的に、プロレタリアートの政治的媒介の問題は依然として未解決なのである。

### 3-3. 大衆、イデオロギーの破れ目

バリバールは『ドイツ・イデオロギー』、『反デューリング論』、『資本論』第1巻の検討を通じて、マルクス主義イデオロギー論のひとつのアポリアを明らかにする。それは、『ドイツ・イデオロギー』のようにイデオロギーを全面的に否定したとしても、あるいは逆に『反デューリング論』のようにイデオロギーの全面的な肯定と体系化の道を選んだとしても、プロレタリアートと大衆の「接合」を導く理論の不在に直面するというアポリアである。経済学批判の理論的な位置を特定しえた『資本論』第1巻においても、このアポリアは残されていた。これら三冊の著作に見出されるイデオロギー概念の浮動は、このアポリアにぶつかったマルクスとエンゲルスが解決策を見つけないままに、問題を先延ばししていったことを示すのである。

私がここで強調したいのは、イデオロギーのマルクス主義的理論という着想は、史的唯物論を観念的に仕上げる手段、史的唯物論による社会的全体性の表象において「穴を埋める」手段、したがって史的唯物論を観念的に完全な説明の体系へと構成する手段でしかない […] ということである。この何度も生まれ変わる計画は、[次のような] 症候として解読される必要がある。「社会的全体性」が必要だとすれば——もっともそれは、認めようが認めなからうが、あらゆる社会学、あらゆる「社会科学」の野心である […] ——それは、社会的全体性の所与の表象や構造の図式のうちに、完全に原因を突き

止めるためである<sup>43</sup>。

バリバールは、マルクス主義が他のあらゆる社会科学と同様に、社会を全般的に説明しようとする社会的全体性への傾向を持つことを指摘する。マルクス主義の特質は、それが階級概念によって社会的全体性を復元し、これを排他的に解読しようとする点にある。しかし、階級概念へとあらゆる社会的事象を収斂させ、そこに唯一の原因を求めようとしても、階級と大衆の「接合」のアポリアが残されたままであるために、それは唯物論をあくまで「観念的に」完成させることでしかない。したがって、マルクス主義におけるイデオロギー概念の浮動とは、階級によって大衆を完全に包摂することの不可能性の現れなのである。階級と大衆の接合に関するイデオロギーの一般理論は、それゆえ構想することができない<sup>44</sup>。換言すれば、イデオロギー概念の浮動は、階級概念だけで社会的全体性を打ち立てようとするマルクス主義の試みがつねに失敗することの兆候として、理解することができるだろう<sup>45</sup>。

<sup>43</sup> *Ibid.*, pp. 277-278.

<sup>44</sup> バリバールは1960年代から70年代にかけて、アルチュセールともっとも近い立場にあったが、両者のイデオロギー論は正反対の性格を持つことを指摘しておきたい。アルチュセールのイデオロギー論が、「イデオロギーは歴史を持たない」という『ドイツ・イデオロギー』のテーゼに着想を得たイデオロギーの非歴史的な一般理論であるのに対し、バリバールのイデオロギー論の主眼は、イデオロギー論を歴史化することでその一般理論の不可能性を証明することである。この対照的な性格は、アルチュセールが再生産過程におけるイデオロギーの作用を強調することで、階級と大衆の「接合」を目指したのに対し、バリバールはイデオロギーの全体化の不可能性を強調することで、階級と大衆の「非・接合」を明らかにするという両者の決定的な立場の違いに由来すると考えられる。Cf. Louis Althusser, *Sur la reproduction*, Paris, PUF, 1995. [『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、平凡社、2005年]

<sup>45</sup> 階級概念によってはプロレタリアートと大衆の弁証法的な関係を考えることができないからといって、両者が存在論的に分離しているわけではない。階級と大衆の接合は、それが個々の具体的な「状況 (conjoncture)」と結びつく場合にしか、考えることができないということである (Étienne Balibar, *La Crainte des masses*, op. cit., p. 248)。この点で、バリバールのマルクス解釈にもっとも適合するのは、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』のマルクスであるだろう (Karl Marx, *Le 18 Brumaire de Louis Bonaparte*, Paris, Éditions sociales, 1963. [『ルイ・ボナパルト

以上、ここまで『ドイツ・イデオロギー』、『反デューリング論』、『資本論』第1巻をめぐるバリバールのイデオロギー論を検討してきた。そこから明らかになるのは、プロレタリアート概念の全体性の主張に対して、大衆概念がいわば「過剰」であるということである。バリバールのイデオロギー論とは、マルクス主義のイデオロギー概念の浮動をたどりなおすことで、この階級と大衆の「非 - 接合」のアポリアを浮かび上がらせる試みである。そしてこの「非 - 接合」が、マルクス主義のうちに、大衆の問題系が階級とは独立して存在することを示すのである<sup>46</sup>。

## 結語

大衆の登場という戦後フランスの社会状況の変化は、それに伴って思想状況も変えた。時代の変化に対応していないという批判がマルクス主義に向けられ、その信用が大きく揺らいだのである。マルクス主義という「大きな物語」の危機によって、大衆の主題は、「大衆消費社会」や「サイレント・マジョリティ」など、社会学的観点からより微細に分析されるようになった。

マルクスとエンゲルスのテキストに立ち戻り、階級と大衆の「非 - 接合」を浮かび上がらせるバリバールの試みは、こうした時代状況と共振する側面を有する。そこからは、時代に寄り添いその変化を取り込みながら、自らの思想を変化させてゆくひとりの哲学者の姿が浮かび上がってくる。

トのブリュメール 18 日』植村邦彦訳、柄谷行人付論、平凡社ライブラリー、2008 年)。

<sup>46</sup> この点についてスチュアート・ホールは、イデオロギーに対する「政治的なものの現実的非決定性」を認める必要を説く。経済的な審級による決定を「限界の設定、パラメーターの確定、行動領域の規定、存在の具体的諸条件、社会的実践の『所与性』』といった観点から理解すべきとし、アルチュセールのテーゼ「最終審級における決定」を言い換え、マルクス主義を「第一審級における経済的なものによる決定」として考察するよう求める (Stuart Hall, "The Problem of Ideology : Marxism without Guarantees," in David Morley and Kuan-Hsin Chen (ed.) *Stuart Hall : Critical Dialogues in Cultural Studies*, London / New York, Routledge, 1996, pp. 25-46. [「イデオロギーという問題——保証なきマルクス主義」大中一彌訳『現代思想』第 26 巻 4 号、1998 年、44-65 頁])。階級の決定に対して「文化」の相対的な自律を主張するホールと、大衆の相対的な自律を論じるバリバールの間には、明らかな類似がある。

本稿はバリバールのイデオロギー論がそうした試みの核であるという観点に立ち、これを検討の題材とした。考察を通じて明らかになったのは、バリバールが大衆概念を階級概念との連続性において捉えること、さらにはこの大衆概念が階級概念に対して過剰であること、これら二点であった。バリバールのイデオロギー論は、マルクス主義に大衆の主題が階級とは別に存在することを明らかにしており、そうすることで、階級から大衆への移行を説明する理路をマルクス主義の内部から導出することに成功している。

他方で、バリバールの思想が時代状況の単なる追認だけではないという点も、指摘する必要があるだろう。社会学的な一連の概念による大衆の分析は、大衆をより精緻に描き出した半面、しばしばこれを否定的な仕方では捕捉してゆく過程でもあった。さらにこうした大衆像は、1970 年代半ばからフランスを席卷した全体主義論によって、上書きされることになった<sup>47</sup>。ファシズムとスターリニズムを同質の体制とみなす全体主義論では、指導者に盲目的に従う大衆像が頻繁に喚起される。これにル・ボン、タルドラが論じた 19 世紀の街頭の非合理的な大衆が重ねられることで、異なる位相や時代を大幅に圧縮した今日の一般的な大衆理解が形成されている。

バリバールの大衆論はこうした大衆論とは一線を画している。本稿はバリバールのイデオロギー論の論理に内在してこれをたどり直すことで、この思想家が引いた階級から大衆へという力線を内側から素描したにすぎない。しかし、これをバリバールの道程と重ね合わせ、その射程をはかることも可能である。バリバールのイデオロギー論から導出される理論の宛先のひとつとして、本稿では最後に、1980 年代以降盛んになるフランスの旧植民地出身の移民労働者の運動の存在を指摘しておきたい<sup>48</sup>。フランス人労働者の移民労働者に対する人種差別の問題を取り上げ、移民労働者の運

<sup>47</sup> Perry Anderson, *La Pensée tiède. Un regard critique sur la culture française*, suivi de *La Pensée réchauffée*, réponse de Pierre Nora, trad. William Olivier Desmond, Paris, Seuil, 2005 ; Enzo Traverso, *Le Totalitarisme. Le XX<sup>e</sup> siècle en débat*, Paris, Seuil, 2001, pp. 81-87. [『全体主義』柱本元彦訳、平凡社、149-157 頁]

<sup>48</sup> Étienne Balibar, *Les Frontières de la démocratie*, Paris, La Découverte, 1992, pp. 19-95.

動を支えるバリバールの姿のうちに、その大衆概念の具体的な宛先のひとつを見出すことができる。

バリバールの大衆論はこのように理論と実践をまたぐ包括的な取り組みであり、さらなる解明のためにはこれら両面から接近することが必要となるだろう。本稿はバリバールのこの大衆をめぐる問いかけを大衆の主題と暫定的に名づけ、これを考察した。したがって、バリバールにおける大衆の主題を彼のマルクス主義に関する側面に限定して論じたという意味では、本稿はその一部を取り上げただけにとどまる。その意味で本稿はこのバリバールの大衆論の考察のための準備作業として書かれた。このバリバールの大衆論の全体を考察するためには、いまだ多くの課題が残されているが、バリバールのマルクス読解が彼の大衆論において重要な位置を占めていることがこれまでで確認できたことで、これを本稿の結論としたい<sup>49</sup>。

---

<sup>49</sup> 本稿は日本学術振興会「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム」の研究成果の一部である。

## 参考文献

- Anderson, Perry, *Considerations on Western Marxism*, London, New Left Books, 1976. [『西欧マルクス主義』中野実訳、新評論、1979年]
- , *La Pensée tiède. Un regard critique sur la culture française*, suivi de *La Pensée réchauffée*, réponse de Pierre Nora, trad. William Olivier Desmond, Paris, Seuil, 2005.
- Althusser, Louis, « Marx dans ses limites » [1978], dans *Écrits philosophiques et politiques*, Tome 1, textes réunis et présentés par François Matheron, Paris, Stock/Imec, 1994, pp. 359-524. [「自らの限界にあるマルクス」『哲学・政治著作集 I』市田良彦・福井和美訳、藤原書店、327-484頁]
- , *Sur la reproduction*, Paris, PUF, 1995. [『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、平凡社、2005年]
- Althusser, Louis, Étienne Balibar, Roger Establet, Pierre Macherey, et Jacques Rancière, *Lire le Capital*, 2 tomes, Paris, Maspero, 1965. [『資本論を読む』今村仁司訳、全3巻、ちくま学芸文庫、1996-1997年]
- Balibar, Étienne, *Cinq études du matérialisme historique*, Paris, Maspero, 1974. [『史的唯物論研究』今村仁司訳、新評論、1979年]
- , *Sur la dictature du prolétariat*, Paris, Maspero, 1976. [加藤晴久訳、新評論、1978年]
- , *Spinoza et la politique*, Paris, PUF, 1985. [『スピノザと政治』水嶋一憲訳、水声社、2011年]
- , *Écrits pour Althusser*, Paris, La Découverte, 1991. [『ルイ・アルチュセール——終わりになき切断のために』福井一美訳、藤原書店、1994年]
- , *Les Frontières de la démocratie*, Paris, La Découverte, 1992.
- , *La Philosophie de Marx*, Paris, La Découverte, 1993. [『マルクスの哲学』杉山吉弘訳、法政大学出版局、1995年]
- , *La Crante des masses. Politique et philosophie avant et après Marx*, Paris, Galilée, 1997.
- , *La Proposition de l'Égaliberté*, Paris, PUF, 2010.
- Balibar, Étienne et Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe : les identités ambiguës*, Paris, La Découverte, 1988. [『(新装版) 人種・国民・階級——揺らぐアイデンティティ』若森彰孝ほか訳、大村書店、1997年]
- Baudrillard, Jean, *À l'ombre des majorités silencieuses ou la fin du social*, Fontenay-Sous-Bois, Cahiers d'Utopie, 1978.
- Eagleton, Terry, *Ideology : An Introduction*, London/New York, Verso, 1991. [『イデオロギーとは何か』大橋洋一訳、平凡社、1999年]
- Engels, Friedrich, *Anti-Dühring (M. E. Dühring bouleverse la science)*, trad. Emile Bottigelli, Paris, Éditions sociales, 1950. [『反デューリング論』村田陽一訳、全2巻、大月書店、1970年]
- , *Socialisme utopique et socialisme scientifique*, trad. Émile Bottigelli, Paris, Éditions sociales, 1977. [『空想より科学へ——社会主義の発展』大内兵衛訳、岩波文庫、1966年]
- Fourastié, Jean, *Les Trente Glorieuses ou la révolution invisible de 1946 à 1975*, Paris, Fayard, 1979.
- Gauchet, Marcel, *La Démocratie contre elle-même*, Paris, Gallimard, 2002.
- Gorz, André, *Adieux au prolétariat. Au-delà du socialisme*, Paris, Galilée, 1980.
- Hall, Stuart, “The Problem of Ideology : Marxism without Guarantees,” in David Morley and Kuan-Hsinh Chen (ed.) *Stuart Hall : Critical Dialogues in Cultural Studies*, London /New York, Routledge, 1996, pp. 25-46. [「イデオロギーという問題——保証なきマルクス主義」大中一彌訳『現代思想』第26巻4号、1998年、44-65頁]
- Jay, Martin, *Marxism and Totality. The Adventure of a Concept from Lukács to Habermas*, University of

- California Press, 1984. [『マルクス主義と全体性——ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』 荒川 幾男ほか訳、国文社、1993 年]
- Lukács, Georg, *Histoire et conscience de classe*, Paris, Minuit, 1960. [『歴史と階級意識』平井俊彦訳、未来社、1962 年]
- Marx, Karl, *Le 18 Brumaire de Louis Bonaparte*, Paris, Éditions sociales, 1963. [『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』植村邦彦訳、柄谷行人付論、平凡社ライブラリー、2008 年]
- , *Le Capital. Critique de l'économie politique (Quatrième édition allemande)*, Livre premier, *Le procès de production du capital*, trad. Jean-Pierre Lefebvre, Paris, Éditions sociales, 1983. [『資本論』向坂逸郎訳、全 8 巻、岩波文庫、1969 年]
- Marx, Karl et Friedrich Engels, *Manifeste du Parti communiste*, Paris, Éditions sociales, 1961. [『共産党宣言』大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、1971 年]
- , *Idéologie allemande, première partie Feuerbach*, précédée des *Thèses sur Feuerbach*, trad. Renée Cartelle et Gilbert Badia, Paris, Éditions sociales, 1974. [『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、2002 年]
- Merleau-Ponty, Maurice, *Les Aventures de la dialectique*, Paris, Gallimard, 1955. [『弁証法の冒険』滝浦静雄・木田元・田島節夫・市川浩訳、みすず書房、1972 年]
- Poulantzas, Nicos, *L'État, le pouvoir, le socialisme*, Paris, PUF, 1978. [『国家・権力・社会主義』田中正人訳、ユニテ、1984 年]
- Ricœur, Paul, *L'Idéologie et l'utopie*, trad. Myriam Revault d'Allonnes et Joël Roman, Paris, Seuil, 1997. [『イデオロギーとユートピア——社会的想像力をめぐる講義』川崎惣一訳、新曜社、2011 年]
- Tosel, André, *Le Marxisme du 20<sup>e</sup> siècle*, Paris, Sylleps, 2009.
- Traverso, Enzo, *Le Totalitarisme. Le XX<sup>e</sup> siècle en débat*, Paris, Seuil, 2001, pp. 81-87. [『全体主義』柱本元彦訳、平凡社、149-157 頁]
- Weil, Eric, *Essais et conférences*, Tome 2, Politique, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1991.

※参考文献には、本文中で言及した著作・論文のみを記載した。